

# 哲 学

教授 田 辺 正 英

## ◆ 研究概要

- 1) 人間における実存と安らぎの問題
- 2) 日本仏教における親鸞や蓮如の思想を通しての罪や悪と救済の問題
- 3) キリスト教における罪と救済の問題  
(K. バルトやR. ニーバー等の思想を通して)
- 4) 西田哲学や田辺哲学の絶対無の問題

以上の4項目は第2輯(研究活動一覽)1977・1978に述べたことと大体同じであるが、4)の項目の最近の研究内容をレジユメの形式で述べると次の如くである。

### 絶対無と出会い

出会いが哲学上の問題となって来たのは、主としてM. ブーバーの『我と汝』(1923)が著わされて以来のことである。ブーバー以前にもL. フォイエルバッハによって、我と汝の愛における対話を問題として出会いが提起されている。親鸞などにおいても宗教的な仏と出会いを「遇う」こととして捉えられている。しかし出会いの問題は現在では、宗教的な哲学的な問題から発展して、心理学・精神医学の問題としてもいわれるようになった。実存心理学のロロ・メイをはじめ、現存在分析のL. ピンスワンガーや実存分析のV. フランクルなどでも根本的命題とされている。O. F. ボルノーは、実存的出会いは、教育学的次元にも存在していることを強調している。

さて絶対無を提唱する田辺元博士の『懺悔道としての哲学』においては出会いの問題は如何に捉えられようであろうか。

田辺博士によれば懺悔道は自力的直観に基づくのではなく、他力の転換に媒介せられる行信証であるから絶対無の弁証法的な絶対媒介の論理によって捉ええられることになる。その他力は一度否定せられた自己の存在を肯定し、死から生へ復活せしめる救済の力であるゆえに、救済が懺悔を媒介するともいわれる。かかる田辺哲学の絶対無は、他力的に媒介的に捉えられる限り、何らかの意味で出会いにかかわるものといえる。

M. ブーバーの出会いはすぐれて人格的な出会いであるとともに、『永遠の汝』としての神との出会いを根柢とするものである。「すべての真実なる生はすべて出会いである」とされるが、仏教的に出会いを捉えたのは、武内義範氏の『教行信証の哲学』(昭和

16年刊)・『親鸞と現代』(1974)である。

そこでは「絶望的な罪障の自覚を通じてのみ救済が可能になる」とされ、いわば超越的な絶対他者である汝としての阿弥陀仏の呼びかけと、それに対する能行の主体の応答として人格的な出会いの様相が捉えられる。

この立場に対して青木敬麿氏の『念仏の形而上学』では、出会いは仏と人間が直接に交互媒介し合うのではなく、仏は名号となって、そのすべてを衆生に廻施するものとして、単なる仏と衆生の出会いでなく、仏の廻向と衆生の摂受の関係として捉える。そこでは田辺哲学や武内義範氏の『教行信証の哲学』におけるごとき、懺悔や罪障の自覚を跳躍板として救済せられるのではなく、生れつきのまま、仏からの廻向によって救われ、罪障の深さも知らせられるとする。

かくして田辺哲学の絶対無は、仏と衆生との出会いの様相を成立せしめるが、絶対無は、人格的な仏を超えて出ることによって、出会いが背後に退いてゆくことになり、哲学的な出会いの限界を示さざるをえないのである。

## ◆ 原 著

- 1) 田辺正英：絶対無と宗教体験，富山医科薬科大学一般教育研究紀要創刊号：1-7，1979。
- 2) 田辺正英：絶対無と出会い，宗教研究 第53巻第3輯，242号，1979。

## ◆ 学会報告

- 1) 田辺正英：絶対無との出会いの問題，日本宗教学会学術大会(第38回)1979.11，仙台(東北大学)。

# 歴 史 学

助教授 小 沢 浩

## ◆ 原 著

- 1) 斎藤重右衛門のこと——ある民衆宗教布教者のプロフィール，富山医科薬科大学一般教育研究紀要創刊号：8-19，1979。
- 2) 民衆宗教における「近代」の相剋——教派神道体制下の金光教，日本史研究 202：1-32，1979。

## ◆ その他

解題「富山県農事調査」：明治中期産業運動資料第6巻：1-6，日本経済評論社，1979。